

(3) 爬虫類

【掲載種の解説（爬虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2019」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。また、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、本調査及び過去のレッドデータブックあいち（2002 年版ブック・2009 年版ブック・2015 年版リスト）作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける 5 倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を○印（2000 年以前の確認地域）及び●印（2001 年以降の確認地域）で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても 1 点として表示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 爬虫類 執筆責任者 】

島田知彦 矢部 隆

【 爬虫類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

南知多ビーチランド

あかばね塾 彦坂 真 小鹿 亨 高橋伸夫 吉鶴靖則

(敬称略)

アカウミガメ *Caretta caretta* (Linnaeus)

【選定理由】

静岡県から伊良湖岬までの海岸線は、中部地方最大のアカウミガメ産卵地であるが、産卵数はピーク時の半数にも満たない。近年の傾向では一定の水準を保ってはいるが、この状況が大きく改善される可能性が少ない。

【形態】

雌の繁殖個体は、直甲長は平均 800mm 程度。頭部は大きく頑健。成体の背面は赤褐色。腹面は黄褐色。幼体はともに黒褐色。下顎鱗板は 2～4 対。通常肋甲板は 5 対。前額板は 2 対。重縁甲板は 3 対。背甲鱗板は敷石状で甲の周辺は平滑である。下顎鱗板が複数対あることで他のウミガメ類と区別できる。



豊橋市提供

【分布の概要】

太平洋、大西洋、インド洋に広く分布。地中海にも生息する。温帯、亜熱帯に産卵場所を持つ。国内での産卵は本州中部（石川県、宮城県）以南から九州の太平洋岸、南西諸島。県内では遠州灘に面する渥美半島外浜一帯（豊橋市、田原市）。知多半島や三河湾の島嶼でも産卵があるが少ない。

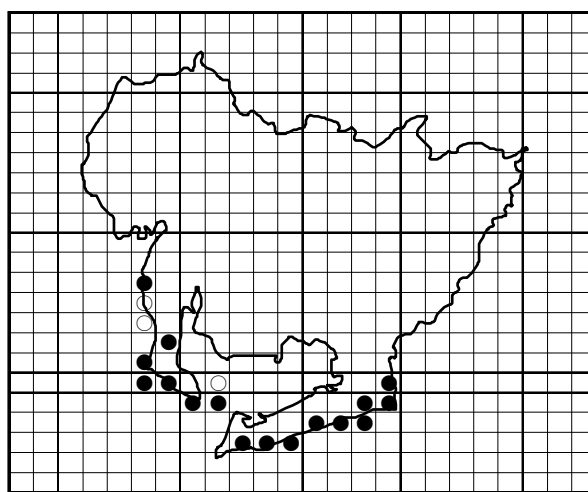
【生息地の環境／生態的特性】

砂浜海岸、沿海域、外洋に生息する。産卵場所として砂浜海岸、生育場所として海洋表層部を必要とする。産卵期は 4～8 月。雌は 2～3 回にわたり上陸産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

海洋の生息状況は不明であるが、上陸産卵数はほぼ横ばい状態である。一番大きな要因は河川による砂の供給不足による、砂浜の減少である。併せて海岸利用の多様化による産卵環境の悪化がある。

県内分布図



【保全上の留意点】

上陸個体は人工光を感知して上陸を回避することが知られている。また、孵化した子ガメは明るい方角を海の方角と認識して光に誘引されてしまい、海に到達できずに外敵に襲われる。いずれも砂浜近くにある人工的な照明が本種にもたらす弊害であり、産卵地周辺に夜間照明を設置する際にはこの点に十分留意する必要がある。また、繁殖には静穏な砂浜環境が必要なため、砂浜利用による卵の踏みつけや上陸個体の攪乱により産卵環境が悪化しないよう、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。また、県条例に基づく指定希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

豊橋市, 2019. 平成 30 年度 豊橋市におけるアカウミガメ保護調査活動に関する報告書.

(島田知彦)

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

生息適地の喪失、および外来動物による捕食や生活への圧迫などの環境悪化に加え、性比の偏りや遺伝子汚染などの目に見えにくい問題も指摘されており、寿命が比較的に長いこともあって、危機的な状況の進行が気づかれないまま放置されがちである。そうした背景を踏まえると、本種の生息地は今後、急速に減少する可能性があるため、注意喚起の意味を含め、準絶滅危惧種と評価された。

【形態】

背甲長はオス約 12cm、メス約 20cm。背甲後部の縁が鋸歯状である。背甲は黄色ないし黄土色で、黒色か黒褐色の点模様が雲状に広がる。各椎甲板の前方中央部に、黒色の斑紋を持つ個体が多い。腹甲は一面黒色。四肢と尾は暗灰褐色か黒褐色で、前膊部と脛部の後縁および尾の背面の左右に、橙色の縦条がある。

【分布の概要】

日本固有種。国内では、本州の中部から西部にかけての地域、四国、九州に分布する。県内では尾張東部丘陵から三河地方、渥美半島、知多半島に分布する。濃尾平野の低地部にはほとんどいないが、小さな個体群がいくつかあり、至急の保護が望まれる。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のクサガメが低地の止水あるいは止水に近い水系に主に生息するのに対して、本種は丘陵地から山地にかけての地域を中心に棲む。頭部が大きく頑丈なクサガメとは異なり、本種の頭部はほっそりしていて、礫の隙間にいる水生昆虫やサワガニなどを食べることができる。配偶期は秋と春で、期間が長い。貯精し、遅延受精することができるので、1回の交尾で数年間受精卵を生み続けることができる。産卵期は6～7月ごろで、1シーズンに2回産卵する個体が多い。1回に6～7個前後の卵を産む。性染色体を持たず、産卵巣内の卵が高い温度に曝されるとメス、低ければオスになる。孵化した稚ガメは、その年の夏の終わりから秋にかけて地上に現れる。川の水底の落ち葉などの堆積物の下や岩の割れ目、あるいは川の岸辺の浸食された横穴や、池沼の水底で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の環境の劣悪化が、減少の大きな要因である。温度依存的に性が決定されるので、産卵環境が好ましくないと、個体群の性比が偏ってしまう (Okada et al., 2011)。またアライグマやウシガエルなどの外来動物が、幼体や、場合によっては成体を捕食したり負傷させたりしている。生態的地位が似ている外来種のミシシippアカミミガメによる生活の圧迫も深刻である。また、人為的に放逐されたクサガメと交雑して、繁殖能力のある雑種個体が生まれている。

【保全上の留意点】

本種が健全に日光浴、産卵、採餌、越冬、季節的移動できるように、河川や池沼の水辺エコトーンの再生、保全が急務である。本種を捕食ないし圧迫する外来動物は駆除する必要がある。特に本種の自然分布地で、クサガメとの交雑が確認された地域、あるいはハビタットの環境の均一化や個体群の高密度化などで交雑が起こる可能性が高い地域からは、クサガメを防除せざるを得ない。

【引用文献】

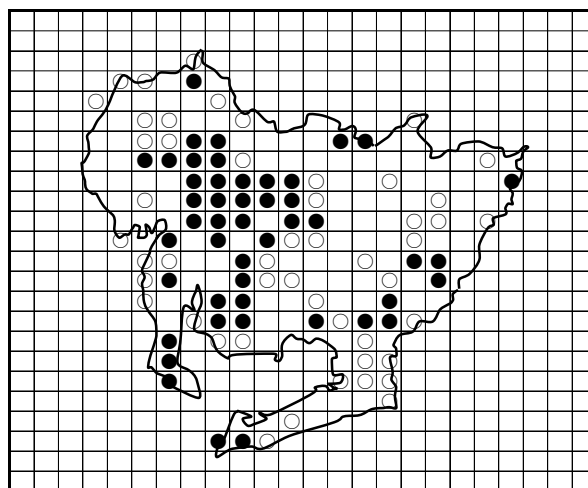
Okada, Y., T. Yabe, and S. Oda. 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). *Current Herpetology* 30(1): 53-61.

(矢部 隆・島田知彦)



美浜町, 2015年1月15日, 島田知彦 撮影

県内分布図



ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann)

【選定理由】

各地で養殖されていた個体が逸出しており、現在確認されているのが在来集団なのか移入集団なのか明確に確認されていないことから、情報不足とされた。

【形態】

甲長は普通 130～180mm だが、まれに 250mm 近くに達する個体も見られる。体の背面は灰褐色。背甲は扁平で鱗板を持たず、柔らかな皮膚に覆われる。鼻孔の先端が強く突出し、肉質の口唇を持つ。指趾間に水かきがよく発達する。日本産の個体の多くは、中国や台湾産の個体に比べ、幅の広い甲を持つ傾向があり、そのため日本産個体群を固有種や固有亜種とする見解もあるが、この特徴だけで日本産個体群を明確に識別するのは困難。

【分布の概要】

広義の *P. sinensis* とされる種は、ベトナムから中国大陆沿岸部、台湾、朝鮮半島、日本本土、ロシア極東地域にかけて東アジア一帯に生息する。国内では本州、四国、九州に広く見られるが、東北地方以北で再生産できるかどうかは不明。南西諸島は移入。県内では平野部を中心に広く生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

完全な淡水性。中・下流域の底が砂泥質の河川、池、沼等に生息する。貝類、甲殻類、水生昆虫、魚類などを捕食する。6～8月に8個～50個の卵を産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は、その地点のカメ相の優占種となることはあまりないが、県下の平野部の河川や池では決して稀な種ではない。しかし、本種は本県においては広く養殖され、多くの個体が逸出している。そうした外来の集団が、在来集団に対する生態的な圧迫を加えたり、交雑による遺伝的な汚染を引き起こしている可能性が高いが、現状ではその実態はよくわかっておらず、その動向に注視する必要がある。

【保全上の留意点】

カメ類は陸上で産卵することから、産卵場所の維持は不可欠である。生息場所から上陸可能な環境の整備が必要である。

【特記事項】

大陸産の種を、中国中南部からベトナムにかけて生息する *P. sinensis* と中国東北部から朝鮮半島、ロシア極東にかけて生息する *P. maackii* に分ける考え方もある。日本本土に生息するスッポンを遺伝的に解析すると、後者に近い遺伝子型を呈する個体が多い一方で、前者の遺伝子型も散見される。このことから、日本の在来集団は *P. maackii*、またはそれに近い系統群であり、後に交易等の人為的な要因で *P. sinensis* が持ち込まれたものと考えられるが (Suzuki and Hikida, 2014)、両者は既に交雑を起こしている可能性が高く、単純な切り分けは難しい。

【引用文献】

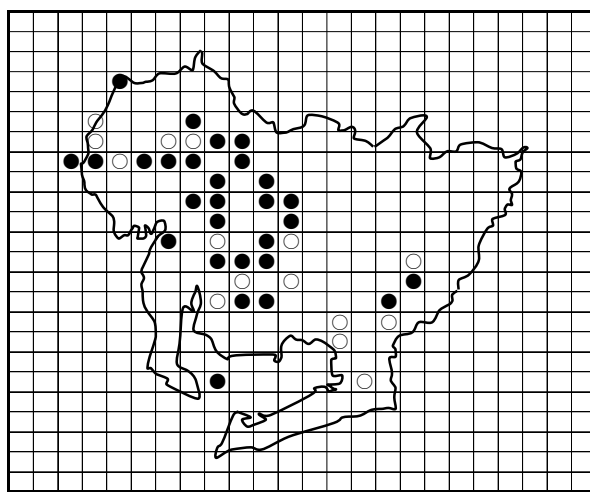
Suzuki D. and T. Hikida, 2014. Taxonomic status of the soft-shell turtle populations in Japan: a molecular approach. *Current Herpetology* 33: 171-179.

(島田知彦)



岡崎市, 2013年8月2日, 島田知彦 撮影

県内分布図



現状ではその実態はよくわかっておらず、その動向に注視する必要がある。

タカチホヘビ *Achalinus spinalis* Peters

【選定理由】

夜行性であることから確認例が少ない。分布域は広いようであるが、個体数など不明な点が多く実態が明らかではないことから、評価を情報不足とされた。

【形態】

頭部は細長く、くびれはほとんどない。眼は小さい。体背面は紫がかった赤褐色、光沢があり、背中線上を細い1本の黒色縦条が頸部から尾部にかけて走る。体鱗はビーズのように盛り上がり真珠光沢がある。鱗は重ならず、間に皮膚が露出する。胴体中央の体鱗は23列でキールを持たない。他のヘビは尾下板が対になっているが、本種は単一であることから区別出来る。腹板数は、145～170枚。瞳孔は円形。体長30～60cm。



豊田市（旧小原村），2015年8月6日，島田知彦 撮影

【分布の概要】

同種とされる集団は中国中南部からベトナム北部にかけて生息するが、日本本土の集団とは地理的にも大きく離れており、別種である可能性が高い。国内では本州、四国、九州とその周辺の一部の島嶼に分布する。県内では丘陵部から山地にかけての記録が多いが、名古屋市市内でも記録がある（西尾・川瀬，2017）。

【生息地の環境／生態的特性】

生息環境は森林で、山地の溪流沿いや林道上で見つける機会が多い印象があるが、平野部の社寺林にも生息することがある。乾燥にはきわめて弱い。地中性で夜間に活動し、ミミズを食する。6～8月頃3～13個の卵を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

地中性のため、生活史には不明な点が多い。おそらく湿潤な森林環境を好み、土地改変や公園管理等による森林の乾燥化は本種にとっては悪影響を及ぼすと考えられる。

【保全上の留意点】

丘陵地等の開発では、湿潤な森林環境を保全する。

【特記事項】

生まれたばかりの幼蛇は全体に黒っぽく、背中線条が目立たない。

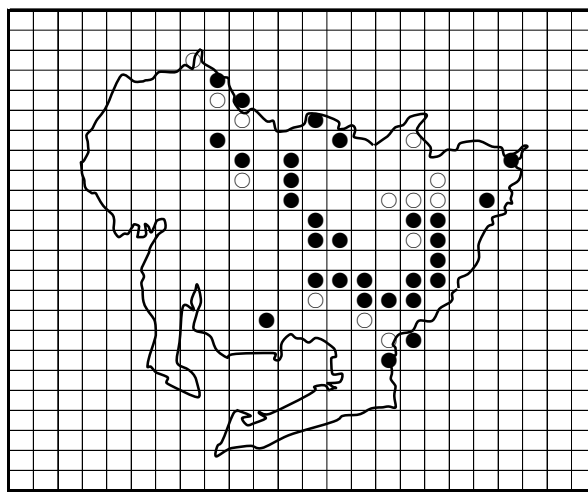
【引用文献】

西尾和久・川瀬基弘，2017. 東海地方におけるタカチホヘビ *Achalinus spinalis* の確認記録と生息環境. なごやの生物多様性 4: 31-41.

【関連文献】

安井謙介・浅香智也，2011. 愛知県豊川市で採集されたタカチホヘビ及びシロマダラ. 豊橋市自然史博物館研報 (21): 27-29. (島田知彦)

県内分布図



シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf)

【選定理由】

夜行性であることから確認例が少ない。分布域は広いようであるが、個体数など不明な点が多く実態が明らかではないことから、評価を情報不足とされた。

【形態】

頭部は比較的大きく背面が扁平、吻端はややにぶく、頸部はあまりくびれない。灰色褐色の地色で、胴に 40 個内外、尾に 15～20 個の黒色横帯が並ぶ。胴体中央の体鱗は 17 列でおおむねキールを持たない。腹板は 200～215 枚くらい。瞳孔は縦長の楕円形。全長 30～70cm。



豊田市, 吉鶴靖則 撮影

【分布の概要】

日本固有種。国内では本州、四国、九州、とその周辺の一部の島嶼に分布。北海道では札幌近郊と奥尻島のみ。県内では丘陵地から山地にかけての記録が多いが、名古屋市市内でも記録がある(矢部, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

樹林地で見られることが多いが、河川敷や公園(安井・浅香, 2011)等にも見られることがあり、生息環境の幅は比較的広いと考えられる。夜行性でトカゲや小型のヘビなどの爬虫類を食べると言われているが、詳しい生態は不明である。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の記録は丘陵地および山地域に多く、特に奥三河の記録が多いが、知多半島及び渥美半島にも確実に生息している。平野部からの情報は乏しいが、目につきにくい種であるため、見過ごされている可能性もある。

【保全上の留意点】

本種は、夜行性で昼間は構造物や石の下に潜んでいることが多い。樹林地の保護や林床の保全に留意することが必要である。

【特記事項】

威嚇や攻撃で効果がないと体を硬くして擬死状態になる。特有の縞模様と、追い詰められたときの攻撃姿勢から、有毒のマムシと混同され殺傷されることが多い。

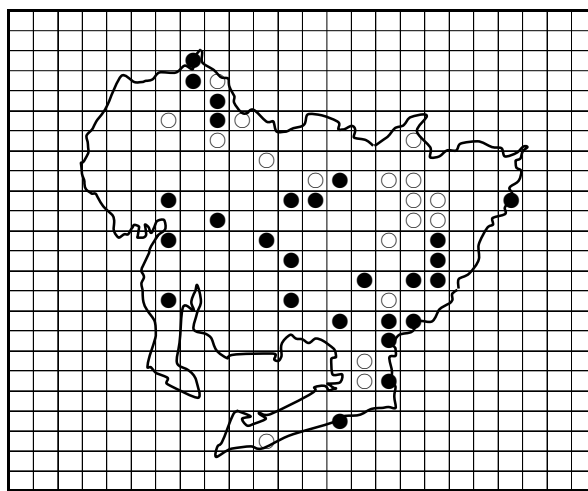
【引用文献】

矢部 隆, 2015. シロマダラ. 名古屋市環境局編 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.119. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
安井謙介・浅香智也, 2011. 愛知県豊川市で採集されたタカチホヘビ及びシロマダラ. 豊橋市自然史博物館研報 (21): 27-29.

【関連文献】

小鹿 亨, 2010. シロマダラの 1 目撃記録. 三河生物 1-2: 62.
吉鶴靖則, 2016. 東海市でシロマダラを記録. 三河生物 8: 41-42.

県内分布図



(島田知彦)

ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* (Boie)

【選定理由】

かつては水田に多いカエル食のヘビの代表格であった種だが、愛知県内の減少傾向は顕著であり、平野部ではほとんど目にするのがなくなってしまった。丘陵地では水田や河川沿いに生き残っているが、詳細な分布や個体数密度は不明であり、今後もさらなる減少が予想されることから、情報不足とされた。

【形態】

頭部は頸部より明らかに大きく、吻は短くて幅が広い。体色には変異が多くて包括的に記載するのが難しいが、普通は基色が緑色を帯びた褐色か暗褐色で、頸部から胴部には黒斑が並んでおり、黒斑の間に不規則な赤い模様が混じっている。後頭部には口角の後ろから背面へ回る黄色い横帯がある。胴体中央の体鱗は19列で顕著なキールを持つ。腹板は150～170枚。瞳孔は円形。全長60～120cmとされるが、普通は80cm以下の個体が多い。

【分布の概要】

日本固有種。国内では本州、四国、九州、とその周辺の一部の島嶼に分布。県内ではかつては全県的に分布していたと考えられるが、最近の記録は山地、丘陵部に限られる。

【生息地の環境／生態的特性】

餌動物としてカエル類や魚類を捕食することから、水辺に近い湿潤な環境を好む。産卵期は6～8月で2～40個ほどの卵を産卵する。顎の後ろには毒腺を持ち、上あごの後ろにある大きな歯で咬まれた場合には毒液が注入されることがある。また、この毒とは別に、捕食したヒキガエルから得られた毒を頸部の皮膚の下にある2列の毒腺に蓄積しており、頸部を咬まれた際には皮膚が破れて毒が出てくる仕組みになっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては全県的に水田の近傍に多く見られたヘビであったが、平野部ではほぼ絶滅している。また、丘陵地の水田であっても、どこでも見られるヘビではなくなっており、全県的な生息情報の蓄積が望まれる。減少をもたらした要因としては、農薬の使用や餌となるカエル類の減少、土地改良による乾田化、ロードキルによる死亡等、様々な要素が考えられる。

【保全上の留意点】

餌となるカエル類や魚類の保全、湿潤な水辺環境の維持によって良好な生息環境を確保する必要がある。また、水田生態系の食物連鎖の中では比較的上位に位置し、生物濃縮の影響を受けやすいことから、農薬の使用は極力控えることが望ましい。

【特記事項】

かつて無毒蛇と考えられてきたが、いくつかの咬傷例とともに有毒蛇との認識が広まり、本県春日井市で起きた死亡事故（小川他，1986）を契機に血清の開発がなされた。

【引用文献】

小川弘俊・大村豊・大橋大造・入谷勇夫・加藤政隆・待木雄一，1986. ヤマカガシ咬傷にて死亡した1例および本邦報告例の検討. 日本臨床外科医学会雑誌 47(2): 250-253.

(島田知彦)



新城市, 2015年7月5日, 島田知彦 撮影

県内分布図

